

現在金沢大学資料館所蔵の明倫堂(文学校)、経武館(武学校)の扁額は、下の写真からも想像できるように極めて立派なもので、はじめてみるものには加賀百万石の威光をこれだけで想起させるに十分であると、私などは思う。

『稿本金沢市史』学事編第一に、「学校は、文武各異なり、其文学所を明倫堂と名づけ、其武学所を経武館と称へ、皆其名を書せる扁額を掛けたりき」とあるように、これらは寛政4(1792)年に創立された金沢藩校明倫堂、経武館に掲げられていたものである。藩校は基本的に武士の学校であり、武士の教養として「文武両道」が要求されたので、文教場と武道場の二つを設ける事が各藩で一般的であった。また、儒学(特に「修身、齐家、治国、平天下」を重視した朱子学)を武士の教養の中心に据えたので、藩校の名称は、「四書」「五経」の儒学の経典から武士の学校に相応しい熟語を採るのが一般的だった。加賀藩でもそうだった。

「明倫」の語は、「四書」の『孟子』滕文公章句上に滕の文公が孟子に施政方針のアドバイスを求めた際に、「設為庠序学校以教之、庠者養也、校者教也、序者射也、夏曰校、殷曰序、周曰庠、学則三代共之、皆所以明人倫也、人倫明於上、小民親於下」と答えたこととされる事に由来している。藩校が治者たる武士が人間の倫理を明らかにし、実践する場であることを象徴するという意味で、当時としては藩校にもっとも相応しい名称であった。そのため、幕末には全国に約二百六十あった諸藩にはほぼ普く設置された藩校の名称として「明倫堂」(名古屋藩、高鍋藩、新庄藩など)「明倫館」(萩藩、宇和島藩、舞鶴藩など)の校名は最も多く使われたものである。「経武」の語は、「五経」の『春秋左氏伝』の宣公十二年の「経武兼攻昧、武之善経也、子姑整軍而経武乎」に出典がある。これら藩校の名称決定は、形式的には創立当時の11代藩主前田治脩であるが、創立にかかわり学頭として招聘された新井白蛾によるものと考えられる。



右から二人目は林学長



「経武館」の扁額
120×270×40 cm

「明倫堂」の扁額 資料館展示室
金沢大学広報紙『アカンサスニュース』
第52号(平成12年12月発行)より

明倫堂の題字も新井白蛾の筆によると言われている。扁額とは「横長の額」の事で、経武館の扁額は、「八家」の一人前田土佐守直方(1747-1823)が書いた。

明倫堂の額の制作時の事情についての同時代史料はほとんど現存していない。30年以上あとの富田景周の『燕台風雅』(1825)に「使先生(新井白蛾一引用者)書明倫堂之額」とある。明治になってからの断片的な言及はあるが、詳しいものは漢学者黒本稼堂『三州遺事, 中』の新井白蛾の項に、「コノ年九月ヨリ明倫堂ノ創築アリ, ソノ結構ノ事ヲ白蛾ニ委任セラレテ, 佶屈経営, 百爾具備, 翌年ノ春落成センカハ, 白蛾ニ命シテ明倫堂ノ額ヲ書カシメラレ, 学頭シテ別ニ学秩五十石下サル。コレニヨリテ献替極メテ多カリシトソ, ソノ額字ヲ書ク, 人シラス心ヲコメラレシモノトミエテ白蛾没後ソノ室ノ長持ヲ披キテミタルニ, 明倫堂三字ノ草紙, ミチミチタリトイフ」とあるくらいである。

しかし、経武館の額については、多くの史料が残っている。石川県県立図書館にある「旧藩学校沿革調」(文部省が全国調査の上、明治24年に発行した『日本教育史資料』の石川県による調査の原本、ほぼ同文のものが同書巻二、160pにもある。)には、次のような史料がある。

史料1

一、武学校之額土州(前田土佐守の事一引用者)へ可被仰付旨御発駕前就被仰出候、右寸法並懸所之儀遂詮議申聞候様不破和平等へ申渡候處矢部八郎左右衛門等へモ示談之上寸法等別紙絵図(不見当)之通被仰付可然ト詮議明倫堂之額ニ二寸通り小ク御座候御治定次第

土州へモ申談出来次第調方重テ入御覧相伺申ニテ可有御座旨寛政四年三月二十四日前田大炊奥村河内守紙面横山山城充則紙面等入御覧相伺候処伺之通ト被仰候条左様御心得御申談可被成候旨同年四月七日返書

史料2

土佐守別紙経武館之文字相調候様先達テ被仰出候ニ付二通り相調見申候調方杯モ可有之哉ニ候得共調方一向ニ習申儀モ無御座字之大小之儀モ難計甚見苦敷御座候得共被仰出之儀ニ付先相調見申候下書二通り指進之候間可然様御取り計之様致度御座候以上

寛政四年六月二三日

前田土佐守

史料3

一、経武館ノ文字相調候様先達テ就被仰出候下書真行草二通り二枚充相調候旨土佐守別紙之通申聞指出候ニ付指上申候以御序被入御覧両様之内何レ可被仰付哉外ニ御好等モ被為在候ハ被仰出之趣御申越可被成候外ニ御好等モ無御座両様之内被仰候儀ニ候ハ重テ本紙調筆被仰付候ニハ及間敷此内ヲ直ニ御用御座候テモ可然哉且又額細工人之儀ハ明倫堂之額被仰付候御細工人沢忠平儀細工格別宜敷様子ニ御座候間忠平へ被仰付ニテ可有御座哉ト遂示談申候思召モ無之候ハ右之趣御伺候テ御申越可被成候以上

寛政四年六月二四日

河内守

山城様

史料4

追テ真行草三様ニ調候様先達テ土州へ申談候處草書ハ調兼候由ニテ両様調指出候此段為御承知申進候以上

右ノ趣致承知則御紙面等入御覽相伺候處真行
両様之内行書ニ被仰付候則可被仰付分一枚
別々ニ御上包ミ被仰付被返下候付キ進申候尤
モ重ネテ本紙調筆ニ不及右下書ノ儘直ニ可被
仰付候並出来等ノ儀ハ紙面之通ト被仰出候条
左様御心得可被成候將又右下書御用無之分三
枚モ致返進候以上

寛政四年七月九日

山城

河内守様

これらからみると、加賀藩校の扁額制作につ
いて、以下のような事情が分かる。

1. 明倫堂の額が先に出来ていた。(史料3)
2. 経武館の額は、その後不破和平等により「明
倫堂之額ニ二寸通り小ク」するよう計画され、寛
政四年三月二十四日に前田大炊・奥村河内守
が書き手として 前田土佐守を推薦し藩主の裁
可を得た。(史料1)
3. 前田土佐守は、慎重を期して、下書き二種
類づつを提出する事をあらかじめ連絡した。
(史料2)
4. 前田土佐守は「真行草三様ニ調候様」命ぜら
れたが、「草書ハ調兼候」ということで真(楷書)、
行(書)二様を同年六月二二日以前に提出し、
藩主治脩が七月九日までに行書の方を選んだ。
(史料4)
5. 真(楷書)、行(書)二様で書いた下書は四枚
あったが、選んだ行書のを、そのまま版下
にする事となった。(史料4)
6. 明倫堂之額の細工人は、「細工格別宜敷様子
ニ御座候」沢阜忠平であり、経武館の額も同人
へ依頼することを、「八家」の一人で学校総奉行

の奥村河内守(1757-1803)が提案していること。
(史料3)

注、沢阜忠平は、聖堂予定地であった敷地内
天神社の「御鎮守天満宮」額の作成者でもある。
前出の『三州遺事』中巻にある彫刻の名人沢岡
忠平と同一人物と思われる。

明倫堂、経武館の位置は、3度変わった。『金
沢市教育史稿』には、次のように書かれている。
なお、加賀藩の場合、いつも文学校も武学校も
隣地にあった。「明倫堂及び経武館の位置は屢
変遷せり、寛政4年より文政2年2月迄は出羽町
今の公園内に建設あり、此地は即国老横山氏
の旧邸地なり、・・・文政2年2月学校の授業を休
止し、両学校とも其隣地奥村伊予守有輝の別邸
即ち今の公園東隅の地に移し、同6年授業を始
めしが、同5年3月再び両校を城西仙石町大槻
蔵之允旧邸地即今の第四高等学校敷地内に移
し、同年七月竣功業を始む。」この二回の移転
時に扁額がどう運ばれたかがわかる史料は、今
のところ存在しない。しかし、扁額も同時に移っ
た事は言うまでもなからう。

なお、近代以後におけるこの扁額の運命や
役割については、金沢大学創立50周年記念展
示『蔵書展 金沢大学の源流』(金沢大学創立
50周年記念展示実行委員会、金沢大学附属図
書館、金沢大学資料館 平成11年5月29日発
行)の「4.『明倫堂』『経武館』の扁額と師範学
校」(在田則子氏筆)に詳しいので、ここでは省
略する。ただし、石川県師範学校校友会誌『会
誌』創立60周年記念号(昭和9年12月)により、
この扁額と石川県師範学校の縁の深さを示す

資料を少し補っておきたい。[なお、石川県師範学校同窓会『会報』99号(昭和10年6月)も同じ内容である。]

昭和9年11月11日に行われたこの際の記念式辞で、当時の中島正勝校長は、「本校ニハ旧藩時代ノ明倫堂並ビニ経武館ノ扁額ガ保存サレテ居リ、生徒ハ日(旦)夕之ヲ仰イデ、文武両道ノ修養鍛錬ニ努メテ居ルノデアリマスガ、是ニ依リテ之ヲ觀マスレバ、私共ノ学校ハ百二十万石提封藩学ノ正統ヲ継承シテイルト申シマシテモ敢テ過言デハナイト存ズル次第デアリマス」と述べている。

また、当時の大阪毎日新聞の記事が転載されているが、この中で「加賀百万石の藩学明倫堂と経武館の正統を継ぐものは、わが石川師範であると彼らはいふ—それは明倫堂、経武館に掲げられた扁額が、ともに師範の講堂と武道場に掲げ保存してあるからで、彼らの誇りとしてゐるのも無理もなく、そして、百万石提封藩学の精神をも継ぐことに努めている。」

と書かれている。また、「宏大な講堂は、…入口明倫堂の巨額の左右には、陸軍大臣林銑十郎閣下の剛健醇美、前拓務大臣永井柳太郎氏の明朗敢為の二額があり。側壁の前田利為侯爵の養正の額とともに…」とあるが、林銑十郎、永井柳太郎、前田利為の額はこの石川県師範学校創立60周年を記念して書かれたものであり、いずれも現在金沢大学資料館に收藏されている。

さて、石川県師範学校同窓会『会報』の方に

は、さらにこの二つの扁額が写真で入れられた明治31年本科卒業の池上鋼他郎の「明倫堂と経武館」という文章も載っている。この中で、

「約四昔も以前の懐古に対しては殆ど明晰を欠ける余の脳裏に…其の当時の校舎(自分の在校当時の広坂校舎—引用者、以下同じ)等は女子師範と第二高女の校舎に充てられてゐて新設地の男子師範学校(野村校舎)はその外観に於てそして亦四囲の環境を異にして居るがため、何だかかけ離されてゐる感が致されます、されど師範がもつ伝統的精神に於ては何ら異なる所がないのである。それは前田直方書になる経武館扁額とそして藩学を標榜する明倫堂額とが四十年前の吾輩に呼びかけらるゝのである。是は今の女子師範講堂に相對峙して南北に高く掲げられてあり…またこの講堂は全校生の討論演説会場にも使用されてゐたのである。師範の生徒は必ずやこの二額面によつて歴代培われて来た事を確保(信)する…」とある。

『稿本金沢市史』学事編第一(大正5年～)には、石川県師範学校が広坂にあった時代は、「一を講堂に、一を雨天体操場に掲げてあつたとある。広坂時代にもいずれかの時期に経武館の額は掛け替えられたことになる。

(教育学部教育学教室)